

# 想像の翼を鍛えることが、 これからの時代では 重要になってきます



アフレスコ手法で大がかりな壁画の制作や精力的な個展発表により、「現代絵画の旗手」として世界的に知られる絹谷幸二画伯。若いころから親交があり、画伯に絵の手ほどきを受けている武藤敏郎副総裁。違った角度から時代を見詰めている二人に、絵画を切り口に、社会と人間にアプローチしてもらった。

写真 栗原克己



武藤敏郎

日本銀行副総裁

[むとう・としろう]

1943年埼玉県生まれ。66年東京大学法学部卒業、大蔵省入省。95年大臣官房総務審議官、97年大臣官房長、99年主計局長、2000年大蔵事務次官、01年財務事務次官を経て、03年財務省顧問。同年日本銀行副総裁就任

Toshiro Muto



絹谷幸二

画家・東京芸術大学教授

[きぬたに・こうじ]

1943年奈良県生まれ。1966年東京芸術大学卒業、独立賞受賞。68年同大学院壁画科卒業、独立美術協会会員。71年イタリア留学。安井賞、イタリア・マニフェスト賞、美術文化振興協会賞、日本芸術大賞、毎日芸術賞、日本芸術院賞などを受賞。93年より東京芸術大学教授。現在、日本芸術院会員、独立美術協会会員、東京芸術大学教授

Koji Kinutani



## 奈良という郷土が フレスコ画の世界に 導いてくれた

**武藤** そもそも絹谷先生が、油絵ではなくフレスコ画を選んだのは、どんな動機からですか。

**絹谷** 私の生まれは奈良。生家は三〇〇年ぐらい前の家です。そういう時間のサイクルがちょうどフレスコ画と合うんです。漆喰の壁とか。また、わたしの乳母の弟が左官屋さんで、その子どもと一緒に遊んでいたんです。土をこねて遊んでいたんですね。そういう下地がありましたし、奈良の時間や空間には油絵はあまりなじまない感じもしました。それから、私の個人的な先生である鳥海青児先生の油を抜いて描く油絵の影響も受けています。

**武藤** 奈良という郷土の性格がフレスコ画に導いてくれたというところがあったわけですね。

**絹谷** フレスコ画の特徴は、漆喰が乾く際に空気中のCO<sub>2</sub>を吸う力を利用して絵の具を入れ定着させるところにあります。

**武藤** 一瞬にして描いて、固着される。つまり、修正不可能です。ミケランジェロのシステナ礼拝堂の天井画なんかは、こっぴどく描いたわけですから、天才的な描写力と大変な才能を要しますね。

**絹谷** 才能と合理性と準備性。そして、その対極にある瞬発性。これらを同時に持つてなければなりません。下絵、小下絵、大下絵、描くときに必要な絵の具の量を大量に作っておく……など、事前準備の必要があり、その合理性は西洋合理主義がここから生まれたと思うぐらいです。なお、漆喰が乾くのは、約二四時間で、ジョルナータと言います。この間に、塗った分だけは描き終えるスピードと決断力、胆力、応変な対応力や柔軟性も要りますね。

**武藤** まるで仕事の話の聞こえているようですね。絵描きさんという、悩み悩んで、描いては消しというイメージがあります。でも、絹谷先生の絵は、ビジネスやほかの分野にも相通ずるものがあるような気がします。

## 美の追求は究極の リスクマネジメント

**絹谷** 美しいものを追求するには、心も美しくなければなりません。街も美しくなければいけない。美しいものに囲まれていると安全だと思うのです。美しいものは踏みにじれないでしょう？ 経済用語で言えば、美の追求はリスクマネジメントだ。東京をもっと芸術的な街にしておかないと危ないぞと言っているのです。

**武藤** 三〇代のころに京都の朱雀門の再建問題があつて、絹谷先生に相談したときも、リスクマネジメント論を展開されました。わたしが、「今ごろ朱雀門を再建しても意味がない」と言うのと、「武藤さん、再建しないとだめだよ」と熱弁を振るわれましてね。

**絹谷** 戦争中に京都に原爆を落とそうと計画していたアメリカが、結局は落とさなかったのは、文化が核を抑止したからだと言ったことがあります。その意味では、蒋介石総統が故宮博物院

を作ったのは、安全保障政策でもあるのです。

**武藤** まさに絵をきわめていくと、社会問題や経済問題、環境問題など、これからの社会がどうあるべきかまでを含めて見えてくるわけです。ところで、絹谷先生は、美というものの経済的価値を重視しておられますね。

**絹谷** 「羊」という字に「大」をつけると「美」になります。日本人は、島国でほとんど侵略を受けていないし、緑に囲まれているところにも食べられるものがあるというので、油断している面があります。例えば、砂漠で今逃げないと殺されるとしたら、何を持って逃げるでしょうか。それは、荒地に強い羊が芸術家や音楽家なんです。日銀と関係が深い紙幣は、国が破れては紙くず同然です。教育も重要ですが、すぐには役に立ちません。しかし一枚の絵は、言葉が通じないところでも一食と交換できるかもしれません。泥が陶器に変わる、歌が投げ銭になる。本当に危機になったときに役立つのがアート・アンド・ミ

\* フレスコ画は、壁画を描く手法の一つ。生乾きの漆喰に顔料で絵を描き、壁が乾燥する過程の化学変化で絵を壁に定着させる。イタリア語の「fresco(新鮮な・生氣ある)」に由来する。

ユージックなのです。

**武藤** 確かに砂漠の民は経験上、命をつなぐ糧が何であるかをよく知っています。

**絹谷** 芸術や音楽を大切にします。ところが日本人は美といえば教養だのやさぎだのといった上辺だけの教条主義をとっています。実はそうではない。芸術や音楽は国境を超えるし、言葉の違いも超えます。何よりも心に響きます。全く隔たりというものがありません。一枚の絵には、そういう心の受け渡しをするような、目に見えない箱があるんです。

### 空想の翼を広げて 絵空事の中に まごころを描き出す

**武藤** 平面絵画はある意味で、ありようがない世界ですね。絵空事といいますが、現実ではない面があります。

**絹谷** 現実ではないが、現実を支えています。先日、『ウソ力（想像力）の鍛え方』（日本経済新聞社刊）という本を書きました。絵空事とか空想、イメージ

のことです。華嚴真經の中に、「仏というものは、うまい絵描きのようなものだ」とあります。それは、ともに空事の世界だという認識です。

**武藤** 我々が受けた絵画教育は、写生重視で、ウソを描きなさいとか、空想で描けばいいとは決して教えてくれませんでした。画伯について絵を学んでいるうちに、自分のイメージを描くことが分かってきました。

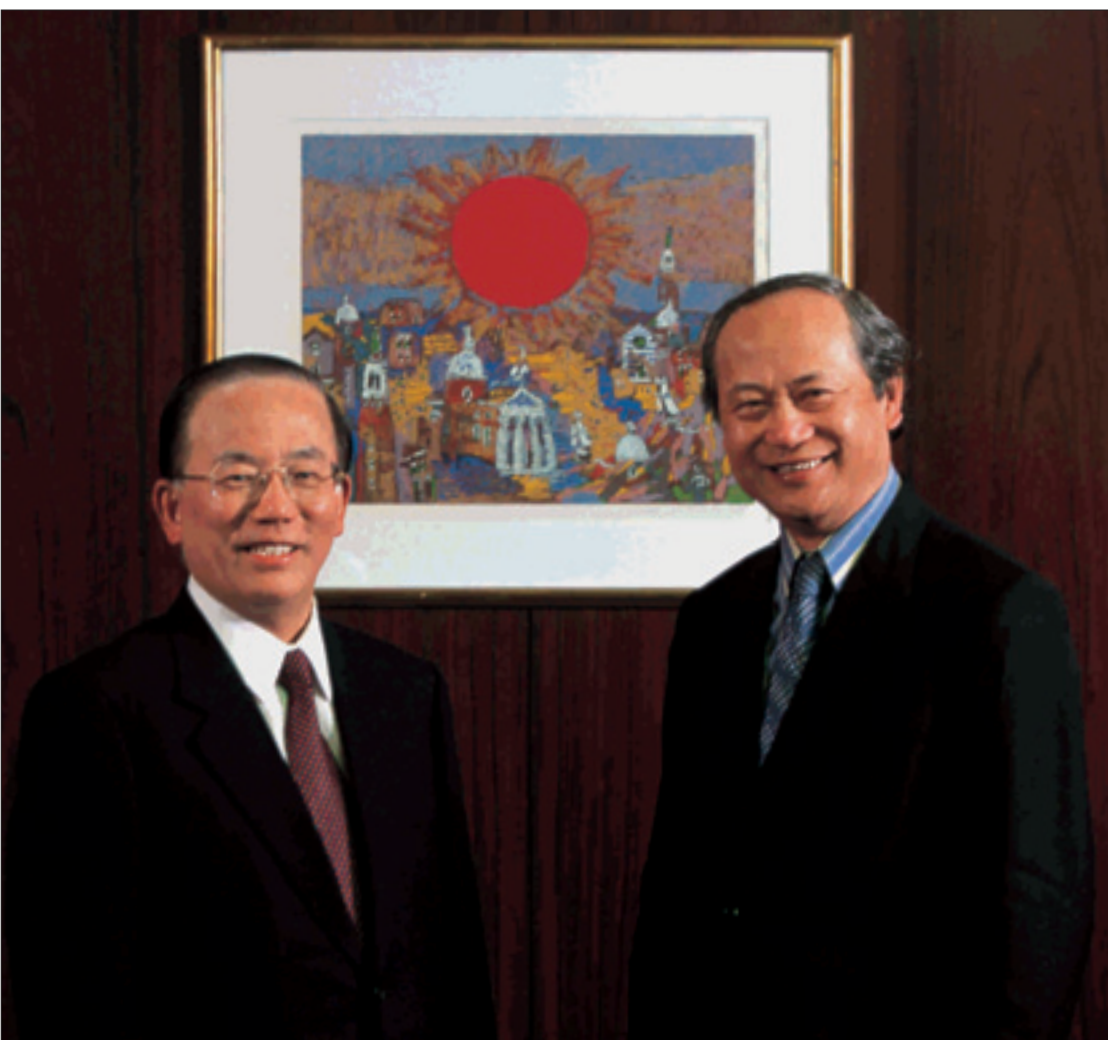
**絹谷** 絵はいくらそっくりに描いても、手をつかめない世界です。例えば、富士山をそっくりに描いても、こんな小さい世界の中のもんです。月も太陽も入ってしまいます。そっくり描くのも絵空事の世界です。だから最初からありようもない世界を描いても同じでしょう。絵の世界では、限られた世界の中で、どんなふうにも飛ぶことのできる翼を持つことができます。こつした翼を鍛えることは、これからの時代、ますます必要になってくるでしょうね。

これまでは石は石のように描きなさいという世界でした。そ

れが一步進んでマグリットのように、石が宙に浮いていてもいいというふうになってきたのです。実際に地球の裏側では、逆さまに歩いているわけです（笑）。

すと、そこに形があるのですが、そこからエネルギーというのか、形とは次元の違った、強烈な何かを感じます。この『ヴェネツィアの風景』。こんなにみんな揃っているような場所はどこにも

**武藤** 絹谷先生の絵を見ていま







ない。しかし、間違いなくヴェネツィアだし、そこから明るい太陽とアモレを感じます。

絹谷 そういう自由の翼を心の中に持っていたいというのが、わたしの主張です。奈良の都を

見て、みんな古いものがないと思っ  
ていますが、学ばなければなら  
ないのは、あの古色蒼然とした  
味わいよりも、創建当時の「青  
丹よし」の心意気。つまり、黄  
金の仏様があったり、青い旗が  
立っていたり、のぼりが立って  
いたり、赤い柱に連子格子があ  
ったり、カラフルな進取の気性  
です。目線はずっと唐や西域な  
ど、遠くの方を望んでいた。

武藤 日本は、わび、さびとか、その後の中世の芸術的、文化的な環境の中で、その精神性を理解するようになりまし  
た。しかし、奈良時代のお寺は金

ぴかで、それを美しい、新しいと思っ  
ていたのでしょう。我々はそう  
いうものが全部はげ落ちたもの  
を見て、古くていいと思っ  
ています。そういう鑑賞の仕  
方は、どこか違っている。昔の  
ものを愛でるのもいいですが、  
新しいものを創り出していくこ  
とも重要です。やがて千年後に  
あの昭和、平成の時代にこんな  
文化があったというオリジナル  
なものを創っていく。こんな  
創造性が、最近不足し始めて  
いるような気がしてしかたがあ  
りません。

絹谷 展覧会でも、最近の作品は  
すごくいい。ただ、覇気がな  
い。レベルの同一性が強く、言  
わばどれもいい感じですが。違  
和感というか香りがいい。イワ  
シのように固まってしまつと、  
ほかの価値観が現れたときには  
一網打尽になってしまう危険性  
があります。だから、百花繚乱  
で、ある部分がやられてもある  
部分は生きのびられるというよ  
うにしないといけません。

武藤 日本銀行のような大組織  
にも、そういう側面はあります。

イワシの集団では具合が悪い。  
間違うときには一斉に間違つて  
しまします。いろいろな人間が  
いて、ぶつかり合っていた方が、  
何か間違つていても誰かがそれ  
を正して、結果的にはフェール  
セーフというか、安全弁が働  
きます。わたしはそういうパ  
ラエティーに富んだ人の集団が絶対  
必要だと確信しています。世間  
から見ると、十把一絡げの「日  
銀マン」かもしれないが、内実  
はそうであってはいけません。

## 新たな価値を生み出した ピカソこそ 「ウソカ」の極致

武藤 誰かが言っていました  
が、絹谷先生とピカソ、マチスの  
絵は、一〇〇メートル離れてい  
てもわかる。ほかの絵描きさん  
は、みんな同じように見えて、こ  
れではやっぱりいけないですね。  
絹谷 姿勢としては、相反する  
ことを同時に見る目を持つと  
する必要があると思います。

武藤 個性豊かな天才的な人  
があらゆる分野で出てきにくい  
時代ですね。現代教育の理念が、

武藤副総裁の『ダンス』。思い切った色遣いとメルヘンチックな構成で、個展でも人気を呼んだ。



粒ぞろいの人間をどう育てるかにありますから。ぬるま湯的なブレイクスルーのない社会に、日本がならないためにも、絹谷先生流のそういう新しい発信が必要なんです。

**絹谷** 今は、すべて数値で置き換える時代です。しかし、「これがすばらしい」というのは、な

かなか数値に置き換えられませんか。その意味では、数値の社会ももつと磨いていかなければなりません。「好きだ」とか、「いいな」ということにも配慮が必要だということです。

**武藤** 昔の芸術家は、自由奔放に自分自身の美を追求してきました。空想の世界に生きて、絵

や彫刻に自分のイメージを固定していたのです。今、それを見るために何億もの人が詣でています。富が生まれているのです。もともと材料費はゼロに近いのですから、これほど付加価値の高いものではありません。

**絹谷** レオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザという女は、今何億稼いでいるかわかりません。奈良の大仏さんだってそうですよ。当時の国家予算の半分ぐらいを使っただけじゃないですか。それが千何百年間も生き続けて、人々に功德を与えています。

**武藤** 印象的なのは、ピカソ。横から見た顔と真正面から見た顔を組み合わせればこうだと言われれば、そうかなとは思いますが。ああいうものを自分で創り上げて、「どうだ。参ったか」と押しつけているようなところがある。それが、いつの間にかすばらしいものになってしまう。

**絹谷** その「ウソ」は、大変すばらしい。ピカソが出たおかげで、価値の創造という分野が飛躍しました。この点、我が国は少し遅れています。ピカソを美

という観点で見たら、そんなに美しいとは思えません。しかし、ピカソを認めた国というのは、恐ろしい。飛躍の翼を持つています。ピカソを一人つくることは、金銭的価値では永年にわたってつづれない会社を作ったような価値があるでしょう。ピカソの価値は、それにとどまりません。まず常識を覆しました。進取の気性を人々に受け入れさせたことだけをとっても、日本の大会社数社分ぐらいの価値はあると思います。

**武藤** ピカソがずっと日本にいたら、単なるおかしい画家だということ、誰も一顧だにしないかったかもしれませんね。ところが、スペインやフランスは、そういうのを認めるんですね。

**絹谷** でも、最近はずっと違ってきて、日本もそういうのを認めるようになってきました。ただし、欧米社会が、異質な価値観、革命に近い価値観を、平気で取り入れ、価値を付加していくところには驚嘆します。

**武藤** 人間の頭脳は、まか不思議なもので、ほとんど無から有



を生じさせるような能力を持っています。自分で構築したアイデアや思想、観念は、ほとんど

絵空事です。それが莫大な影響を人々に与えたり、ものすごい価値が生まれたりします。これが創造の本質でしょう。だからこそ、そういう頭脳の活動が心を豊かにし、相手の心も豊かにすることを、十分に考えなければいけません。

昨年わたしが、個展を開いたときに「感銘を受けました」と三日続けて見に来てくれた人がいました。わたしの絵でさえも人を感動させる力を持っていたことは驚きでした。この力というのは何なのか。これは非常に重要なことです。一般の人も大なり小なりそういう何かを持っているわけですから、それが結局は社会を活性化していくことにつながるのではないかと思えます。

**絹谷** そのとおりですね。それは本当に仏が語ったような世界なんです。仏さんが手を差し伸べられたのが、相手の心に映ってはね返ってきたのです。だ

から、絵は物のように見えますが、物の世界ではないのです。

例えば、久隅守景の『夕顔棚納涼図』。その世界は「以心伝心の世界」です。四本柱の貧しい住まいで、子供と親二人が月影を見ている。これは富があるとか、ないとかいう世界ではありません。でも、ここに描かれている空間は、ものすごく豊かです。そういう豊かな受け渡し、武藤さんの絵を通じてあったということです。

**武藤** 「以心伝心の世界」というのは、深い心の世界ですね。

**絹谷** 心の豊かさを絵を通じて反射しているという感じです。それは、言葉が違ってても、所得が違ってても、そんなことは関係なく手をつないでいる世界です。今のインターネットの世界も、そういう感じなのかもしれません。こんな世界が芸術の世界にはあるのです。感動を共有する人がいる。このことがすばらしいのです。武藤さんのような大切な仕事をしている方が、絵を通じて創造力を磨かれるということはすばらしいことです。

## イタリアを鏡に 日本のすばらしさを 再認識する

**武藤** 絹谷先生は、イタリアに留学されていますが、何か今までにないものを得られましたか。

**絹谷** イタリアに着いた途端に、体がぼつと浮き上がるぐらいの自由な風を満身に受けたという感じです。木と石の違いはありませんが、意外と雰囲気は奈良に似ていると感じました。朝、鐘楼が鳴るなど、宗教的な感覚に満ちあふれているところも似ています。このイタリアからは、ものすごい照射力を受けました。そして、イタリアという国は西洋文明のいわゆる根もとなんだということを体感できました。

**武藤** 人間には一つの転機があるって、絹谷先生の場合それがイタリア留学だったんですね。もちろん、それ以前に内在する何かがあって、イタリアでみずからそれを求め、触発され、出会ったということだと思います。

確かに、イタリアは不思議な国で、塩野七生さんの『ローマ人の物語』を読んでも、完成さ

れた人間社会が既に紀元前にあったわけです。だから、ヴェネツィアやフィレンツェを訪ねると、そこには西洋文明の原点というものがある。しかし、現代だけをとらえれば日本は独自に発展して、それと一応背比べをしてもおかしくない国になっています。

**絹谷** 『源氏物語』などもありまして、昔もすごかったんですよ。芸大の学生たちと古美術研究旅行といって、二週間、奈良・京都に行きます。フィレンツェの全盛時代に匹敵するものが京都にあったり、奈良にはもつと古いものがあつたりするわけです。何ら遜色ありません。サモトラケのニケやウィーナスを見ても、すばらしさでは勝っています。ですから、日本人はもつと自信を持っていいます。戦後日本が決定的にいいというのではありませんが、奈良時代や平安時代、鎌倉時代、それぞれの時代のすばらしさによって、自信を持っていいます。

**武藤** 日本人よ自信を持て、ということ締めくくりました。本日はありがとうございました。